

書 評

牛垣雄矢編：『身近な地域の地理学—地誌の見方・考え方—』古今書院，2024年5月刊，110p.，2,600円（税別）

本書のまえがきによると，高校までの地誌学習では，大陸や国，地方といった遠くの広域スケールが主に扱われるが，それに対して本書の趣旨は，都道府県，市区町村，小学校区，商店街といった「身近な地域」とされるスケールで日本国内のいくつかの地域を取り上げ，伝統的に地域そのものを研究対象としてきた地理学の見方・考え方をを用いて，地域の読み解き方を示すことである。

本書は序章およびそれに続く12の章から構成されるが，序章ではまず，各章における地理的考察の「実践」を理解する上での，地理学・地誌学の理論的・概念的基礎を提示している。キーワードを挙げると，系統地理学，地誌学，等質地域，結節地域，地域構造，地域スケールであり，地理学の教科書的な書籍では必ずと言っていいほど扱われる内容である。評者も大学の教職科目で「地誌学」を担当しているが，ほぼ同じ内容を教えている。しかし，既存の教科書の書籍と重複するからといって，これらの内容が本書で省略されたとしたら，本書は単なる地域紹介の事例集にとどまってしまう，教育書としては不十分ということになる。そのため重複するとはいえ，本書の序章であらためて整理して示していることには価値がある。その中で，系統地理学と地誌学を対比して「地域でみるのか，地域をみるのか」と表現しているのは，簡潔で興味深い。

1章からは，具体的な地域を読み解いた事例であり，12の地域が取り上げられている。序章で編者が「その地域において様々な事象と関わりを

もつ事象を中核事項と設定し，それらの関わりで地域の特徴や構造をとらえる」と定義している動態地誌としてのとらえ方を，市区町村や都道府県といった身近な地域とされるスケールで活用している。本書のまえがきには「各章では，扱う地域の特徴を読み解く観点を示しており，多くはタイトルに表れている」とある。そのためここでまず，各章のタイトル＝動態地誌的理解における中核事項を示しておく，

- 1章「東京の外港としての歴史が築いた地域性—横浜」
- 2章「工場からマンションへ，生産から生活の場へ—川崎」
- 3章「大型商業施設が集まるまち—立川」
- 4章「江戸・東京との近接性を軸にした地域構造の変化—千葉県」
- 5章「江戸・東京との関係で築かれた歴史的景観—川越」
- 6章「地形がもたらす魅力と課題—甲府盆地」
- 7章「雪国に起きる開発の動き—越後湯沢」
- 8章「首都としての都市の発達—東京」
- 9章「世界に注目されるまち—盛岡」
- 10章「旧城下町都市の空間構造とまちづくりの関係—犬山」
- 11章「港湾機能の変化に伴う市街地の移動—神戸」
- 12章「明石海峡大橋開通に伴う交通と商業の変化—徳島」

この目次をみて評者が感じたのは，各章の順番には何かしらの意図があるのだろうかという点である。本書にはそのことに関して何も書かれていないが，もしランダムに並べただけなのだとしたらもったいないし，意図があったのならばどこか

で説明してほしかった。

各章の内容を評者のコメントとともに簡潔に紹介すると、1章は、東京大都市圏、市全体、都心部という三つのスケールで横浜の地域性や地域構造を理解しようとしている。2章は、工場とマンションを軸に川崎という地域の変化を描いている。図2.17として川崎の内部構造を説明した地域モデルが出てくる。事象間の関係を示した模式図だけでなく、このような図で地域内部の特徴や構造を説明する方がより興味深い。3章は、立川の地域変化を概説しているが、動態地誌としてのまとめに相当する記述がない。他章にならって「かつての基地のまち+交通利便性=大型商業施設の集積」ということを図示してほしかった。4章は、五つのコントラストの概念を用いて千葉県の地域構造を理解しようとしている。本章にも地域モデルのような図が出てくる。5章は、交通だけでなく徳川家や日本橋の蔵造り建築とのつながりで、川越の景観にみられる江戸・東京との関係を解釈している。本章を読むと、二度の大火も川越の地域形成にとって重要なできごとであったはずなので、最後の図に盛り込んでほしかった。6章は、盆地地形ならではの自然条件や農業、食文化について動態地誌的にまとめており、他の盆地にも当てはまる汎用性を含んでいるといえる。7章は、積雪地域における各主体による開発に着目して、越後湯沢の地域性を解釈している。こちらも他の積雪地域に当てはまる汎用性を含んでいるといえよう。8章は、他の章が4~8ページ程度なのに対し30ページを割いている。大都市であるが故に、現在の東京の性格や構造を規定している事象が数多くあるからであろうが、無数に考えられる事象の中から何を取り上げ、何を取り上げないかがまさに、地理学者としての編者のセンスの見せ所である。結論としての模式図は人によってさまざまであろうから、それらを持ち寄ってあれこれ議論

するのも面白そうである。9章は、地元住民にとっては当たり前であるが、外国人から高く評価された盛岡の地域性を整理し、地元出身者の立場で解釈し直している。10章は、犬山を訪れる観光客の行動パターンを、城下町の空間構造と関連づけて分析している。こうした視点は、近世城下町を起源とする日本の多くの都市にも適用しうる。11章は、神戸の地域構造の変化を、港湾空間の移動や機能変化と結びつけて説明している。こうした視点も、日本の他の港湾都市に適用しうるものである。12章は、明石海峡大橋架橋による徳島の交通の変化とストロー効果について紹介している。架橋による島嶼部の地域変化としても一般的にみられる現象であろう。

以上が本書の概要であるが、編者を除く8人の執筆者はいずれも、編者の学部ゼミの出身者である。さらにそのうち5人が現職教員(大学1, 中・高校3, 小学校1)として活躍しており、本書は編者の教育者としての成果であるといえよう。本書の序章に「模式図を示すことで、地域における要素間のつながりや、地域の特徴のとらえ方を可視化している」とあるように、多くの章で、事象間の関係を示した図や地域モデルのような模式図が出てくるが、それらにどれほどの妥当性や説得力があるのかが重要な点である。ここに各章の執筆者の地理的センスが表れるといえる一方で、当然、正解のようなものがあるわけでもない。その際に肝となるのは、模式図の柱となる中核事項を何に設定するのかであるが、そのセンスをどのように養うのか、そうしたセンスは地理学者としての長年の調査・研究によって身につくものなのであろうか、学生・院生のうちに(大学教育の中で)習得することができるものなのであろうか、その辺のところについて機会があれば是非、評者も大学で地理を教える立場として編者に伺ってみたい。

本書は、地誌の実践事例集といえるが、本書の

各章で示された地理的な見方・考え方、地域の読み解き方を、本書が取り上げていない他の地域に応用して考えてみるという活用の仕方も想定される。それは小・中学校や高校の地理の授業および大学の教職科目でも実践できることであり、その意味で本書は地理教育の良い教材になる。一方で本書には、事例とした各地域の性格や構造を理解する上で、どこの何に注目すればよいかが提示されているともいえ、当該の地域で巡検を実施する際のハンドブックとしても有用である。

このように本書は、地理教育（地誌教育）の実践的教科書として価値があり、大学の地理教員、教職課程で地理を学ぶ学生だけでなく、小・中・高校で地理を教えている方々にも、是非手に取っていただきたい書籍である。

(山下亜紀郎)

三木一彦：『房総で講はいかに継承されてきたか—信仰の地域誌—』古今書院，2024年9月刊，190p.，3,500円（税別）

本書の目的はタイトルにあるように、房総半島において講集団（組織）がどのように成立し、そして現在までいかに継承されてきたかを明らかにすることである。講とは「宗教上の目的を達成するために、信仰を同じくするものが寄り合つて結成している信仰集団」と定義されるが（民俗学研究所編，1951：189）、時代を経るにつれて互助的な金融組織や職人仲間にもとづく講なども作られた。民俗学者の櫻井によれば、講は大別して宗教的講、経済的講、社会的講があり（櫻井，1976）、本書はそのなかで宗教的講の性格をもつ出羽三山講（三山講）の浸透と継承の地域的背景を、郷土誌、紀行文、民俗調査報告書、講関係文書、石碑などの多様な資料に加えて、著者のフィールドワークによって明らかにされる。

本書は2024年から刊行が始まった「シリーズ日本の地域誌」の一冊である。監修者の米家と山村によると、本シリーズの意図は「日本を構成しているさまざまな地域のなかから、いくつか典型的な地域のあり方を選んで、その地域ならではの特徴がいかに形づくられたかを歴史地理学的に示すこと」とされる。また、本シリーズの書名はいずれも「なぜ〇〇地域は〇〇となったのか」といった問いかけの形式をとっており、読者は「その問いへの答えを想像しながら読み進め」ることができる（米家・山村，2024：ii）。以下ではこうした狙いを視野に入れつつ、本書の内容を紹介したい。

本書の構成は次の通りである。

はじめに

第1章 対象地域の概要

第2章 巡礼と諸社への参詣

第3章 出羽三山信仰と地域

第4章 信仰の重層性と地域社会

第5章 むすびにかえて

「はじめに」は本書の基底となる宗教および地域の捉え方が議論される。本章前半では日本と西欧の「宗教」概念を比較しつつ、日本人は多くの宗教儀礼や年中行事とともに生きており、そうした宗教のありようを地域の特徴と関連させながら描き出すという観点が示される。後半は房総半島の地域性が歴史的に、東京湾などの内海、「黒潮の道」ないし外海、そして関東地方という三つの関係によって規定されており、これら外部との関わり（交流）を視野に入れた考察が不可欠であることが述べられる。

「第1章 対象地域の概要」は、本書の対象地域である房総半島の長生地域および一宮町の沿革について、生業や地域間交流を中心に言及される。長生地域は茂原市と長生郡白子町、一宮町、睦沢